

玄奘の弥勒信仰について

吉村 誠

(駒澤大学)

一 はじめに

三蔵法師として知られる玄奘(六〇二―六六四)は生涯弥勒を信奉してやまなかった。弥勒信仰といえば、現在弥勒がいるとされる兜率天への往生を願う上生信仰や、未来の閻浮提に弥勒が如来として現れることを期待する下生信仰が想起される。また、玄奘はインドの瑜伽行派で唯識教学を学んだが、唯識の根本經典である『解深密經』では弥勒が主要な役割を果たしており、唯識教学を大成した無着は禪定に入って神通力を得、兜率天に上昇して弥勒から『瑜伽師地論』を授かったとされている。⁽¹⁾この瑜伽行派の祖師としての弥勒は、無着の禪定のうちに現れた影像なのか、それとも無着の師として実在した人物なのか、未だ決着がなされていない。このように弥勒のイメージは多様であり、それらを統合的に把握することは困難であるかのように思われる。

しかし、玄奘が生涯祈りを捧げてきた弥勒という尊格が、信仰の対象として統合的に把握されていなかったとは考えにくい。そこで小稿では、玄奘にとって弥勒は一体どのようにに観念されていたのかという問題を考察することにした。資料は主に玄奘の伝記である『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』(以下『慈恩伝』)と、玄奘の旅行記である『大唐西

域記』（以下『西域記』）を使用する。これらは玄奘の旅行記録や言動を弟子たちが編集したものであるから、一次資料に準じるものとみてよいであろう。弥勒に関する記事の内容は多岐にわたるが、ここでは便宜上「現世に関するもの」と「来世に関するもの」とに分けて検討を加えることにする。

二 靈祐を祈る——現世における感応・靈驗——

先ず、玄奘が兜率天を往来し、弥勒の靈驗を得たという話から見ることにした。

玄奘は中インドの阿踰陀国を訪れた。そこは無着が兜率天に上昇して弥勒から『瑜伽師地論』を授かったという伝承のある所である。この国を後にしてガンジス河を船で下っていると、突然盜賊が襲撃してきた。盜賊は乗客の金品を奪うばかりでなく、玄奘を彼らの信奉するドゥルガーへの生贄として捧げようとした。祭壇が設けられ刀が抜かれた時、死を覚悟した玄奘はしばしの猶予を請い、兜率天の弥勒菩薩に向かって次のように念じた。「願はくは彼に生ずるを得、恭敬供養して『瑜伽師地論』を受け、妙法を聴聞して通慧を成就し、還来下生して此の人を教化し、勝行を修めて諸々の惡業を捨てしめ、及び諸法を広宣して一切を利安せんことを」と。そして禪定に入った。すると、玄奘は禪定のうちに須弥山を昇り、初禪から四禪を超え、ついには兜率天の宮殿にいる弥勒菩薩のもとに達し、身も心も歡喜に包まれた。その時、一天にわかにかき曇り、大風が吹き、河は波うち、船は覆らんばかりになった。盜賊はあわてて玄奘に懺悔し、武器を投げ捨て、盗品を乗客に返した。それでも天変地異は収まらない。盜賊が改心して玄奘から五戒を授かると、ようやく波風は収まったという話である⁽²⁾。

これは出来すぎのようであるが、この話を事実ではないと否定する材料も見当たらない。ここでは、この話が玄奘

によって弟子たちに語られ、事実として記録されたということを重視したい。少なくとも、玄奘は禪定に入って兜率天を往来したと感じていたのであり、そのことを疑う必要はないであろう。祈願の言葉によれば、玄奘はただ兜率天に上生して弥勒の教えに与かりたいと願うばかりでなく、将来は弥勒とともに下生して衆生教化に当たりたいと願っていたことになる。玄奘にとって、兜率天への上生は当来の下生につながるもので、両者は一連のものと考えられていたのである。

さて、禪定に入って兜率天に昇り弥勒から教えを授かるという話は、先述の無着の話が有名であるが、『慈恩伝』によれば玄奘にもそのような体験があったようである。玄奘は『大般若経』を翻訳する際、三つの梵本を校合して翻訳していたが、どうしても文が合わず意味不明の所が出て、翻訳に躊躇することがあった。そのような時、玄奘は必ず禪定に入った。その様子は、まるでどこかで誰かから正しい解釈を授かってくるかのようにであった。そうすると豁然として問題が解決するので弟子たちが感心すると、玄奘は「此くの如き悟処は、豈に奘の浅懐の通ずる所ならんや。並びに是れ諸仏菩薩の冥加する所なるのみ」と述べたという。⁽³⁾この話は、玄奘が禪定を通じて仏、菩薩から正しい解釈を授かったということを暗示するものである。ここでは兜率天で弥勒に会ったということは明言されないが、『西域記』にはこれと同様の話が複数あり、そこで教えを授ける尊格はすべて弥勒となっている。

例えば、提婆が喞咀羅(Uttara)羅漢と議論をしたという話では、羅漢は禪定に入った後に提婆と対論し、答えに窮すると神通力によって兜率天に往き弥勒から解釈を授かってきたという。⁽⁴⁾また、徳光が提婆犀那(Devasenā)羅漢に従って兜率天を往来したという話では、小乗に退転した徳光が弥勒に敬意を払わなかったため、羅漢から兜率天への随行を断られ仏果を得ずに終わったという。⁽⁵⁾これらの話では、弥勒は兜率天に住み大乘の教義を決断する存在とみ

なされている。『婆藪槃豆法師伝』によれば、無着は弥勒から「日光三摩提」を教えられたというが、それは兜率天で弥勒から大乘教義の決択を受け、大乘経典の解釈に通達し、禪定から出てもそれを忘れないという三昧であつた。⁽⁶⁾ おそらく羅漢たちの禪定もこれと同様のものではあつたと思われる。これらの事例から類推すると、先の話も玄奘が兜率天で弥勒から『大般若経』の解釈を授かつたということを暗示するものと考えられるのである。

このように、『西域記』には「羅漢」が兜率天を往来したという記事が数多く見られるが、彼らはいつ頃の人物なのだろうか。羅嚩咀羅漢は、彼と対論したのが龍樹の弟子の聖提婆であるとすれば、無着以前の人物である。提婆犀那羅漢は、彼と対論した徳光ともども不明であるが、文中に『婆沙論』が出てくるので二、三世紀以降の人物ということになるだろう。また、末田地迦（Madhyāṇika）羅漢が工人を連れて兜率天を往来し、弥勒像を造らせたという話があるが、彼は阿難の弟子でアショカ王と同時代の人物といわれている。さらに、二百億羅漢が弥勒像を作つたという話があるが⁽⁷⁾（この弥勒像も兜率天を往来して作つたものと思われる）、彼は仏弟子で精進第一と称えられた人物である。⁽⁸⁾ こうしてみると、『西域記』における弥勒は、初期仏教の時代から一貫して兜率天に住み、羅漢が禪定を通じて会うことのできる存在とみなされていることが分かる。

それでは、弥勒はいつから兜率天にいたのだろうか。『西域記』は弥勒という仏弟子が釈尊から授記されるという有名な話も伝えているので、⁽⁹⁾ それによれば釈尊の在世中はまだ地上の人物である。そうすると、弥勒は釈尊の付嘱を受け、仏滅後に兜率天に転生して以来、そこで仏法を護持し、兜率天を往来する羅漢たちに大乘教義の決択を授けている、ということになるだろう。もし弥勒がそのような存在であるとすれば、『慈恩伝』や『西域記』の多岐にわたる弥勒の話も、すべて矛盾なく読むことができるのである。

ところで、玄奘は弥勒に祈りを捧げて禅定に入り冥加を期待したが、弥勒はなぜ兜率天にありながら閻浮提に靈驗を現すことができるのだろうか。『法苑珠林』には玄奘が翻訳したと伝えられる「讚弥勒四礼文」という偈文があるが、そこでは弥勒が、常に正法を説き、宝冠に化仏を擁し、神変を現して衆生を救済する、まるで法身のような存在として礼賛されている。⁽¹⁰⁾もし弥勒が法身であるとすれば、弥勒が兜率天にありながら閻浮提において靈驗を現すことも説明がつくことになるだろう。この考えが何に由来するかは不明であるが、玄奘にとつて弥勒は兜率天にありながら現世に靈驗をもたらす存在として捉えられていたことは確かである。⁽¹¹⁾

三 往生を祈る——来世における上生・下生——

次に、玄奘の兜率往生の祈願について二、三の問題を検討することにした。

玄奘が兜率往生を祈願していたことは既に明らかであるが、兜率天に往生するためにはそれ相應の功德を積む必要があった。『慈恩伝』には次のような記事がある。玄奘は中インドの伊爛拏鉢伐多国を訪ねた時、靈驗あらたかな觀自在菩薩像を拜した。聞けば投げた花が像に懸かると願いごとが叶うという。玄奘は三つの願をかけて花を投げたが、そのうちの第二の願は「二つには修むる所の福慧もて、願はくは觀史多宮に生じ、慈氏菩薩に事へんことを。若し意の如くならば、願はくは花の尊の兩臂に貫挂かからんことを」というものであった。果たして花は見事に菩薩像に懸かったという。⁽¹²⁾ここでいう福慧とは、福德と智慧の二資量のことである。これによれば、玄奘には兜率往生のために福慧を修めているという自覚があったことになる。

そのことは、玄奘の臨終の場面において顯著に現れている。麟徳元年（六六四）正月十七日、病床の玄奘は夢を見

た。それは何百何千もの貴人がやってきて錦や華や宝で玄奘のいる建物を荘厳するという夢であった。夢から覚めた玄奘は、「玄奘一生以来修むる所の福慧、斯の相貌になぞ准なぞふに、功唐捐むなしからざるに似んと欲す」と述べ、弟子の嘉尚に命じて生涯に修めた福慧をまとめさせた。『慈恩伝』には翻訳經典七五部一三三五巻を初めとして、像造、写經、悲田、敬田、灯明、放生、写經などが列挙されている。⁽¹³⁾

ここで注目したいのは造像の量の多さである。先ず「造俱胝画像弥勒像、各一千幀」とある。これは掛物の画像のことである。俱胝とは十の七乗で一億のことであるから、俱胝画像とは所謂千仏画のようなものであろうか。これを千幀作成し、弥勒の画像も千幀作成したという。次に「造塑像十俱胝」とあるが、これは彫像のことである。それを十俱胝、即ち十億も作成したという。俱胝が比喩であるとしても、それは膨大な数であったのだろう。⁽¹⁴⁾ この大量の造像は、兜率往生と何か関わりがあるのだろうか。

確かに、沮渠京声訳の『弥勒上生經』には、兜率往生のために修めるべき功德の一つとして「造立形像」があげられている。⁽¹⁵⁾ ただし、それは数多の功德の一つであり、それほど強調されているわけではない。ところが、玄奘訳の『大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記』を見てみると、弥勒の龍華三会の説法に与かるための功德として、造像がその筆頭にあげられている。⁽¹⁶⁾ そこでは、当来に弥勒の説法に与かることができるのは、第一会では前世で仏事を修めた者、第二会では法事を修めた者、第三会では僧事を修めた者とされているが、このうちの第一の仏事を修めるとは具体的には仏像を作り供養することなのである。そうすると、玄奘による大量の造像も、その功德によって兜率天に往生し、龍華三会の説法に与かることを祈念してなされたものではないか、ということが推察されてくる。

玄奘の造像が弥勒信仰と関わりをもっていたことは、先の話の続きからも推察される。生涯の福慧について報告を

受けた玄奘は、辞別のために弟子たちを集めさせ、さらに「菩提像」の作成を発願した。二十三日には骨組みが完成した像の前で齋を設け、弟子たちに行道させたという。⁽¹⁷⁾菩提像とは釈尊の成道の場面を表した降魔印の像ではないかと推定されているが、『西域記』には降魔印の釈迦像を最初に作ったのは弥勒であるという記述がある。⁽¹⁹⁾そうすると、玄奘が生涯の最後に修めた福德も、やはり弥勒信仰に基づく造像であったということになる。このように考えると、玄奘の兜率往生の祈願では、造像が重要な役割を果たしていたということが言えるだろう。

さて、玄奘は弟子たちに別れを告げる中で、「願はくは修むる所の福慧を以て、有情に廻施し、諸の有情と共に、同じく觀史多天の弥勒の内眷属の中に生じ、慈尊に奉事せんことを。仏の下生する時は、亦た願はくは随ひ下り、広く仏事を作り、乃ち無上菩提に至らんことを」と述べている。これは、生涯に修めた福慧によって兜率天に往き、内衆に生じて弥勒に仕え、当来に弥勒とともに下生して、修行を経て悟りたいという祈願の言葉である。また、「南無弥勒如来応正等覺。願はくは含識と与に、速かに慈顔を奉ぜんことを。南無弥勒如来所居の内衆。願はくは命を捨て已り、必ずや其の中に生ぜん」という願文も唱え、看病の者にも唱和させている。そして、二月五日夜半、弟子の普光が「和上、決定して弥勒の内院に生ずるを得るや不や」と聞くと、玄奘は「生ずるを得」と答えて息を引き取ったという。⁽²⁰⁾これらの願文によれば、玄奘は弥勒の「内衆」や「内院」に往生できるように祈願していたということが分かる。

兜率天には内院と外院とがあり、衆生も内衆と外衆とに分かれている。両者の違いについて、『西域記』には次のような話がある。無着の弟の世親と師子覺とは、日頃から兜率天に往生したいと願い、どちらかが先に亡くなったならば往生のさまを相手に知らせようと話し合っていた。先に獅子覺が亡くなったが三年経っても音沙汰がなく、次に世親

も亡くなったが半年経っても連絡がなかった。ある夜、無着が門人を教えていると、天から世親が大光明を放って降りて来て、無着に礼拝し往生のさまを語った。世親は兜率天の弥勒の内衆に往生したという。彼は蓮華の中に生まれ、蓮華がわずかに開くと、「善く来た広慧」という弥勒の声が聞こえてきた。そして、弥勒を囲遶礼拝した後、すぐさま知らせに来たという。無着が獅子覺について問うと、彼は外衆に生まれ欲楽に耽っているのだ、とても知らせに来ることはできないだろうと答えたという。⁽²¹⁾ このように、同じ兜率天でも内衆と外衆では大きな違いがあり、玄奘はそのうちの内衆に往生したいと願っていたのである。

では、玄奘は本当に内衆に往生することができたのだろうか。それを確かめる術はないが、『慈恩伝』には感通をよくする道宣が、韋將軍なる神から玄奘の往生について知らされたという話がある。それによれば、玄奘は確かに兜率天の弥勒の内衆に生まれ変わり、もう人間には戻らないということであった。⁽²²⁾ しかし、もし人間に戻らないとすれば、当来に弥勒とともに下生することもなくなるので、玄奘の願いは半ば叶わなかったことになってしまう。おそらく道宣がこの話を伝えた人物は、兜率天への上生と当来の下生とが一連のものであることを十分に理解していなかったであろう。

四 おわりに

最後に、玄奘が弥勒を篤く信仰した理由について考えてみたい。唯識を学ぶ者がその祖師である弥勒を信奉することとは自然なことであるが、その信仰が確かなものになったのはやはりインドにおいてであっただろう。例えば、玄奘の師である戒賢は弥勒信仰の持ち主で、常に兜率往生を祈願していたという。『慈恩伝』には、戒賢が夢で文殊、弥

勒、観音の三菩薩に会ったという話がある。戒賢は弥勒に「常に尊処に生ぜんことを願ふも、知らず得るや不やを」と尋ねると、弥勒は「汝広く正法を伝ふれば、後に当に生ずるを得べし」と答えた。文殊は、それはやがて戒賢を訪ねるであろう中国僧に『瑜伽師地論』を教えることであると説明した。三年後、果たして玄奘が『瑜伽師地論』を求めてやってきたという。⁽²³⁾この話を聞かされた玄奘が、戒賢に深い因縁を感じ、弥勒への信仰を深めたことは想像に難くない。

また、『法苑珠林』によれば、玄奘は「西方の道俗、並びに弥勒の業を作す。欲界を同じくするが為に、其の行成じ易し。大小乗の師、皆此の法を許す」と述べていたという。インドでは大乘であれ小乗であれ、仏教徒はみな弥勒を信仰していた。兜率天は同じ欲界なので往生し易いというのがその理由である。これに対して、阿弥陀浄土に往生することは凡夫には難しい。報身仏の浄土は初地または三地以上の菩薩になって初めて見ることが出来るからである。そこに凡夫が往生できるというのは別時意の説にすぎない。だからインドでは、大乘は阿弥陀信仰を認めるが、小乗はこれを認めない、というのが玄奘の意見である。「故に法師一生已来、常に弥勒の業を作す」と『法苑珠林』は伝えている。⁽²⁴⁾このように、インドで本場の弥勒信仰を目の当たりにした経験が、玄奘の弥勒信仰を決定付けたということができるであろう。

以上、玄奘が生涯祈りを捧げてきた弥勒が、どのように観念されていたのかという問題を考察してきた。その結果、『慈恩伝』や『西域記』の弥勒に関する記事は、弥勒を必ずしも過去の仏弟子や、現在兜率天にいる菩薩、当来に下生する如来などに分けて考える必要のないことが知られた。むしろ、玄奘はそれらを矛盾なく統合した弥勒観を持っていたのではないかと考えられる。また、弥勒は兜率天でただ下生を待つばかりでなく、禅定を通じて兜率天を往来

する者に大乘教義の決択を授け、冥加を祈る者に靈驗をもって応えるような存在として捉えられていた。そのような神変を現すことができるのは、弥勒が法身のように解釈されていたことが関連しているように思われる。今回明らかとなった玄奘の弥勒観がどれほどの普遍性を持つかという問題については、後考を期したい。

註

- (1) 『婆薢槃豆法師伝』大正五〇、一八八b—c。
- (2) 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷三、大正五〇、二三三c—二三四b。
- (3) 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷十、大正五〇、二七五c—二七六a。
- (4) 『大唐西域記』卷十、大正五一、九三—b。
- (5) 『大唐西域記』卷四、大正五一、八九一b—c。
- (6) 『婆薢槃豆法師伝』大正五〇、一八八c。
- (7) 『大唐西域記』卷三、大正五一、八八四b。
- (8) 『大唐西域記』卷十一、大正五一、九三四c。
- (9) 『大唐西域記』卷七、大正五一、九〇五c。
- (10) 『法苑珠林』卷十六、大正五三、四〇三c—四〇四a。
- (11) 龍谷大学の楠淳澄教授から、貞慶の弥勒信仰には法身としての弥勒という考えがあることをご教示いただいた。記して謝意を表したい。楠淳澄「貞慶の浄土観とその信仰—弥勒信仰から観音信仰へ—」『龍谷大学大学院紀要』六、一九八五年参照。
- (12) 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷三、大正五〇、二三九c。
- (13) 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷十、大正五〇、二七六c—二七七a。
- (14) 大雁塔の周囲からは多数の塼仏が出土しているが、これが玄奘の発願した「十俱胝像」ではないかという推測がなされている。萩原哉「玄奘発願「十俱胝像」考—「善業泥」塼仏をめぐる—」『仏教芸術』二六一、二〇〇二年参照。
- (15) 『説観弥勒菩薩上生兜率天經』大正一四、四二〇b。

- (16) 『大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記』大正四九、一四a。
- (17) 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷十、大正五〇、二七七a。
- (18) 菩提像を降魔印の釈迦像に比定することについては、肥田路美「唐蘇常侍所造の「印度仏像」埴仏について」『美術史研究』二二、一九八五年参照。
- (19) 『大唐西域記』卷八、大正五一、九一五c—九一六a。
- (20) 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷十、大正五〇、二七七a—b。
- (21) 『大唐西域記』卷五、大正五一、八九六b—c。
- (22) 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷十、大正五〇、二七七b—c。
- (23) 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷三、大正五〇、二三六c—二三七a。
- (24) 『法苑珠林』卷十六、大正五三、四〇三c—四〇四a。

